

## 「 温暖化とリンゴ 」 ( 協同組合通信/山椒弾 ) 平成 17 年 5 月 31 日

台風やヤマセを東北のリンゴ農家は最も恐れるが、忍び寄る温暖化は農林漁業に多大な影響を与えることが分かってきた。農業はとりわけ気象の影響を受けやすい。夏の暑い寒いは農家にとり、死活を左右する重大事。多くの農家は秋の収穫が終えるまで気を抜けない。

日経(5月15日)「地球号は今」の特集は、昨今大人気のリンゴを例にとり、温暖化の恐さを指摘した。

農水省の独立行政法人の杉浦主任研究官の弁、「60年後には現在のほとんどの地域がリンゴの栽培に適さなくなる」「青森県のリンゴは半減する」と予測し、今のうちから品種改良などの対策を訴えた。

リンゴ栽培に適した年平均気温は7 ~ 13 。同氏の気候変動モデルによる推測では、2060年代の東北地方の平野部では、13 以上になると出た。

温暖化の具体的な影響は主に3つ。

### 1) リンゴの色に出る

皮の赤い色素は気温が下がる時に作られる。このまま高温が続けば、皮は緑色のままで色づかない 2) 日持ちが悪くなる 3) 病害虫の除去が困難になる

現在は栽培に適さないとされる北海道などの寒冷地は、逆に気温上昇の恩恵を受ける。恐らく、道内の内陸部を除く多くの地域がリンゴ栽培に適すようになるという。

青森産の人気品種のふじが「えぞふじ」のブランド名になるかも知れない。蝦夷富士は道内屈指のコニーデ型の人気山・羊蹄山。リンゴ畑を背景に草食む羊が北海道の観光絵葉書になることだろう。今の我々の生活水準の維持と選択の結果が、半世紀後に現出する。その頃には、シベリアの大地の恵みを一杯含んだ流水も着岸しないか、着岸日数は極めて少なくなる。知床の親爺(ヒグマ)と遡上する鮭の姿が消える可能性が高い。

ただ、農作物の栽培適地は単純に気温や降水量だけでは決まらない。作物の命は多くは土壌の栄養成分にある。道内と東北の土壌はかなり違いがあり対策が必要。現在の日々の暮らしの結果を反映する天候が、半世紀後の農業を一変する可能性を暗示する意味はとてつもなく大きい。

( 気象情報システム株式会社 高津 敏 )